



Title	劇作家Valle-Inclánの習作期
Author(s)	堀内, 研二
Citation	Estudios Hispánicos. 2001, 25, p. 43-53
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/93848">https://hdl.handle.net/11094/93848</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 劇作家Valle-Inclánの習作期

堀 内 研 二

## I. はじめに

Valle-Inclánは、その生涯を通じて短編、小説、詩、戯曲、評論といった様々なジャンルの作品を発表している。戯曲に関して言えば、Valle-Inclánはかなり早い時期から戯曲の創作を手がけているが、本格的に戯曲の創作活動を開始するのは、*El marqués de Bradomín*『ブラドミン侯爵』(1906)と*Comedias bárbaras*『野蛮喜劇』中の2作品 *Aguila de blasón*『紋章の鷲』(07)、*Romance de lobos*『狼の歌』(07)あたりからであろう。そして*Voces de gesta*『勲いさおしの声』(12)、*La marquesa Rosalinda*『ロサリンダ侯爵夫人』(12)、*El embrujado*『悪魔に憑かれた男』(13)などのように、戯曲は1910年代の寡作の時期においても発表されている。しかし、なんとといってもValle-Inclánが劇作家として高い評価を得るのは1920年以降で、*Luces de bohemia*『ボヘミアの光』(20)をはじめとして、エスペルペントの手法による前衛的な作品を堰を切ったように発表する。

本稿では『野蛮喜劇』が発表される以前の劇作家Valle-Inclánの習作期、1898年頃から1905年頃にスポットライトをあて、作家が演劇とかかわるようになった経緯や、この時期の戯曲作品について考察してみたい。

## II. 役者Valle-Inclán

拙稿「Valle-Inclánとメキシコ」の中で触れたように、Valle-Inclánは1888年頃から創作を始めるが<sup>1)</sup>、その作品の多くは新聞や雑誌に発表した短編、文芸評論、時事評論といった類のもので、最初の戯曲作品が上演かつ出版されるのは、それから11年後の*Cenizas*『灰』(1899)まで待たねばならない。

その間Valle-Inclánは1892年春から1893年春にかけて約1年間メキシコに滞在、帰国後故郷ポンテベドラに戻り処女短編集*Femeninas*『かよわき性』(1895)を出版、そして、1896年からはマドリードに滞在するようになる。

Valle-Inclánと演劇とのかかわりでは、創作よりも舞台のほうが早い。彼は首都のカフェでの同じボヘミアンたちとの集いで中心的な役割を演じる中で、また、友人たちと一緒に街の中を散策する際に、広場を即興の舞台に変え、Hartzenbuschの『テルエルの恋人』や他のロマン主義劇作家の作品の一節を

朗々と吟唱する中で、周囲の友人たち(=観客)を引きつけるみずからの資質を自覚し、役者として成功する可能性の大きなことを実感する。そして、役者になることを志し、当時のスペイン演劇界の大御所的存在であったBenito Pérez Galdósに次のような手紙を書き送っている。

...Desde hace mucho tiempo acaricio la idea de dedicarme al teatro, como actor, para lo cual he estudiado un poco, y creo tener algunas disposiciones. Pero usted sabe las dificultades con que aquí se tropieza para todo. Necesito el apoyo de una gran Autoridad, y ruego a usted que me preste el suyo, recomendándome a Carmen Cobeña, a Emilio Thuillier y a Donato Giménez...<sup>2)</sup>

この依頼の手紙が直接的に奏功したかは定かでないが、友人のJacinto Benaventeから自作品*La comida de las fieras*『猛獣の食事』への出演依頼が舞い込む。Valle-Inclánの役はTeófilo Everitという人物の役で、端役ではあるが明らかに作者BenaventeはValle-Inclánを頭に入れてこの人物を作り出したようである。Valle-Inclánはこの戯曲を上演するE. ThuillierとC. Cobeñaの劇団に加わり、1898年10月からリハーサルに入る。

*La comida de las fieras*はマドリードのコメディア劇場で1898年11月7日初演された。この公演そのものはBenaventeにとって最初の興行上の成功となったが、Valle-Inclánの初舞台は批評家たちの注目を引くことなく、将来の大劇作家は深い失望の念にとらわれる。Valle-Inclánは失意のあまり、以後の舞台を拒否したが、Benaventeの説得により、さらに2度ほど舞台に上がる。

Parece ser que ayer lo hice muy mal y he decidido no trabajar nunca más... Yo no puedo trabajar. Lo hice muy mal. Y no quiero repetir la suerte. No se debe reincidir en las cosas, cuando se hacen mal no deben repetirse.<sup>3)</sup>

この公演における唯一の成果というか結果(というのもValle-Inclánはその晩年に彼女と離婚することになるからであるが)は、劇団の若い女優Josefina Blanco y Tegerinaと知り合ったことであろう。彼女とは1907年8月結婚することになる。

Valle-Inclánはこの後もう一度役者として舞台に上がる。1899年1月21日、コメ

ディア劇場で初演されたAlphonse Daudetの小説*Les Rois en exil*『流謫の王たち』をAlejandro Sawaが戯曲化した作品に端役で登場する。のちにエスペルベントの戯曲『ボヘミアの光』の主人公 Max Extrellaのモデルとなる親友のSawaに勧められて再び舞台に上がったValle-Inclánであったが、彼の老将軍の演技に対する批評家たちの目は今度も冷ややかであった。そして、このような役者としての不評や同年夏に起こった不運もあって、Valleは気まぐれな役者稼業とすっぱり縁を切ることになる。

### Ⅲ. 左腕の喪失

1899年、Valle-Inclánの生涯において最大の危機のひとつとも言える不幸な出来事が起こる。7月のある午後のこと、アルカラ通りとサン・ヘロニモ通りの間にあったいきつけの喫茶店Café de la Montañaで、Valle-Inclánはいつものように友人たちと寄り集い、文学談義等に花を咲かせていた。その場の話題は、ポルトガル人の風刺漫画家Leal de CámaraとLópez de Castilloというアンダルシアの若者の間で数日前から行われている「スペイン人とポルトガル人とはどちらのほうが勇敢か」という他愛もない議論に決着をつけることであった。この時、Valle-Inclánは解決策として両者による決闘を持ち出した。これに対し、店に入ってきたばかりのジャーナリストManuel BuenoはLeal de Cámaraがまだ未成年であることを理由にその考えに異を唱えた。

-No se canse usted, Valle; el duelo no se puede celebrar, porque Leal de Cámara es todavía menor de edad...

-¿Qué entiende usted de eso, majadero?...<sup>4)</sup>

Valle-Inclánの罵倒にManuel Buenoは侮辱を覚え、一步退き、手にしていたステッキで身構える。一方、Valleはテーブルの上にあったビンの首をつかみ、それで相手に殴りかかろうとする。(この頃Valleが怒りっぽかったのはいつも腹をすかせていたせいだろうという説もある。)しかし、機先を制したManuel BuenoのステッキがValleの左手首に打ち下ろされ、カフスポタンを打ち砕き、Valleに軽い裂傷を負わせる。その場は大したこともなくおさまるが、Valleがその傷をさして手当てをせず放置しておいたために、数日後手首が腫れだし、痛みがひどいので医者に行くが、すでに壊疽が始まっており手遅れで、左腕を切断することを余儀なくされる。

こうしてValle-Inclánは片腕を失うことになるが、それまでに長い山羊ひげ、長髪、鼻眼鏡、ネッカチーフ等により作り上げてきた「作家らしい」奇抜な風貌に、もうひとつ極め付きのものが付け加えられることになった。しかしながら、レパントの海戦において華々しく戦い、ラッパ銃の銃創により左腕を失ったドン・キホーテの作者の場合と比べ、Valle-Inclánの左腕喪失のいきさつはあまり自慢できたものではなかった。だが、Valleの空想力は自由に羽ばたき、いささか不名誉なこの出来事を一大壮挙に変えてしまう。すなわち、彼は時と場合に応じ、いろいろな話をでっち上げ、周囲のものに語り聞かせていたようである。そのうちRamón Gómez de la Sernaが紹介しているものをいくつか挙げておこう。「ライオンとの冒険」によれば、メキシコの密林で飢えたライオンに出会ったValleは、ナイフで片腕を切り取り、それをライオンに投げ与え食べさせ、その間に逃げたという話を、また、「剽窃者攻撃」の中では、自分の文体を盗用する作家に手を焼いたValleが、左腕ではあるがそれを使い思う存分剽窃するようにと、軽蔑の意をこめ、自分には不要の腕を与えるという話を作り上げている。<sup>5)</sup>『冬のソナタ』のブラドミン侯爵にも、作者である自分と同じ運命を背負わせるが、カルリスタ戦争中における左腕の名誉の負傷、切断という武勇伝に変えて描いている。

#### IV. 最初の戯曲*Cenizas*『灰』

この不慮の出来事に際し、Benavente, Martínez Sierraらの友人たちは性能のよい義手を購入する資金集めのために、Valle-Inclánの最初の戯曲*Cenizas*の上演を企画した。この作品は処女短編集*Femeninas*『かよわき性』(1895)中の短編*Octavia Santino*『オクタビア・サンティーノ』を戯曲化したものである。

初演は1899年12月7日マドリードのララ劇場で、Benavente率いるTeatro Artístico劇団によって行われた。また、この作品の刊行も同劇団によって初演と同時に行われ、Valle-Inclánはこの本にBenaventeへの献辞を添えている。公演のチケットの値段は高かったが全部売り切れ、劇場は超満員であった。しかし、公演そのものは観客の興味をさして引くことなく、特に、結核で死ぬヒロインを演じる女優が健康そのものの立派な体軀をして登場するに及んでは観客の嘲笑が起りかけたほどで、新聞批評もほとんど関心を示さなかった。

*Cenizas*はValle-Inclánの短編作家から劇作家への移行を示す作品で、作家のお気に入りのテーマであつたらしく、何度も改作されている。初出は短編*¡Caritativa!*『慈悲深い女よ!』(1892.6.19), 次が*La confesión*『告白』(1892.7.10)で、いずれもメキシコ滞在中新聞*El Universal*に発表されている。これがさらに

*Femeninas*中の短編*Octavia Santino*となり、1899年戯曲に改作されて*Cenizas*になるわけであるが、最終的にはこれがさらに改作され1908年刊行の*El yermo de las almas*『魂の荒野』となる。

*Cenizas*は、若い画家Pedro Pondalとみずからの恋のために夫と子供を捨てこの年下の愛人のもとに走ったOctavia Goldoniのあいだの愛の葛藤と、道徳の名のもとに二人の不倫の恋を終わらせようとするOctaviaの母親とRojas神父の社会通念を中心に展開される。Octaviaは結核のため病床にあり、同棲中のPedroがその看病にあたっている。死を間近にひかえたOctaviaは母親とイエズス会士の説得に心が揺れ動くが、情人と別れることを拒む。しかし、Pedroはふたりに責めたてられるOctaviaの苦悩をみかねて、彼女が心穏やかに死ねるように自分の家を去る。OctaviaはPedroが家を去ったことに強いショックを受け、深い悲しみのうちに死ぬ。

Valle-Inclánはこのドラマにおいて、若い芸術家と年上の夫人の不倫という、それまでのリアリズム演劇では見られなかった男女の組み合わせの中で、(というのもリアリズム演劇では二人の年齢は同じくらいか、男性のほうが年上というのが通例であったから)、情熱的でデカダンな愛を称揚し高らかに謳いあげ、Octaviaの母親やRojas神父の説く社会通念や道徳は退けている。Théophile Gautierの小説『モーパン嬢』の序文にみられる「真に美しいものは何の役にも立たない。有用なものはすべて醜い」というような純粹芸術の理念を信奉する審美家のValle-Inclánにとって、リアリズムのブルジョワ的道徳観は無用なものであった。当然のことながらValle-Inclánのこの退廃的なドラマはリアリズム演劇よりもロマン主義演劇に負うところが多く、「*Cenizas*においてValle-Inclánはブルジョワ的リアリズム演劇の感性、思想、志向のいずれにも対抗している。Pérez Galdósの社会派ドラマのブルジョワ的結婚観に対しても、結婚を神聖視するJosé Echegarayの社会派メロドラマに対しても、Jacinto Benaventeの社会風刺劇に対しても。Benaventeはそのドラマの中で、*Cenizas*におけるValle-Inclánとは違って、ブルジョワ道徳の基盤にあえて触れるようなことはしなかった。」<sup>6)</sup>

#### V. ふたつの象徴主義演劇の作品

*Cenizas*以降、*El marqués de Bradomín*(1906)までValleの戯曲の上演はない。この間は、*Sonatas*『四季のソナタ』四部作(02-05)が発表されるモデルニスタValle-Inclánの絶頂期である。

この間にValle-Inclánは戯曲体の小品をふたつ書いている。それらは短編集

*Jardín umbrío*『仄暗き庭』の中の*Tragedia de ensueño*『夢幻の悲劇』と*Comedia de ensueño*『夢幻の喜劇』であるが、発表年は厳密には同じではない。この短編集が初めて現れるのは1903年で、同名のタイトルの下に5編が収められ、*Tragedia de ensueño*はその中に含まれている。*Comedia de ensueño*が発表されるのは『仄暗き庭』の増補版*Jardín novelesco*『物語風の庭』(05)の中で、14編の中に入っている。なお、現在我々が手にするアギラール社の選集やエスパサ＝カルペ社のアウストラル叢書中の*Jardín umbrío*は全17編になっている。

*Tragedia de ensueño*と*Comedia de ensueño*はいずれもメーテルランク風の象徴主義演劇といわれている。すなわち、Valle-Inclánのこの両作品には「筋らしい筋も、劇的な事件もなく、あたかも霧の中に浮かんだように性格も心理も判然としない人々が登場し、死の影におびえて、運命には全く無抵抗で破局に至る」<sup>7)</sup>というメーテルランクの演劇の宿命観と神秘的雰囲気とが漂っている。

#### 1) *Tragedia de ensueño*

この小品はValleが*Cenizas*(1899)以後初めて書いた戯曲で、神秘的な運命の力に翻弄される一家の悲劇が扱われている。

幕が開いた直後の祖母のモノローグを見てみよう。

「この世では、なんて多くの苦労があたしらを待ち受けていることか! あたしには七人の息子がいたが、この手で七枚の経帷子を縫うはめになった.....息子たちは育て上げる苦しみをあたしに嘗めさせるために生まれ、その後、この年寄りの手助けになろうという時に、死神がひとりまたひとりとあたしから奪い去ってしまった。悲しみにくれるこの目は、いまだ嘆き倦んではいない。あの子らは、若くて優しい七人の王だった!.....あの子らの寡婦はまた嫁ぎ、あたしはこの門の前を二度目の婚礼の行列が通るのを目にし、そのあと、この門の前を賑やかな洗礼式の行列が通るのを見た.....ああ! なんにあたしの孫たちだけが、五月の薔薇のように散っていった.....孫たちはたくさんいたから、あたしの指は日夜産着を紡ぐのに疲れ果てた!.....ヒキガエルとナイチンゲールの歌うそこの道を通り、みんな運ばれていった。この目はどんなに涙を流したことか! 天使たちの白いお棺が通るのを見るがあまり、あたしは盲目になってしまった。この目はどんなに涙を流したことか、そして、いまなおどんなに涙を流さねばならないことか! 三日ほど前から、この門のところで犬どもが吠えている。あたしは死神がこの孫だけは残しておいてくれるものと当てにしていたが、同じく連れ去りに来たらしい.....あたしにはこの子がみんなの中でいちばん可愛かった!.....父親が埋葬されたときは、まだ産まれてなく、母親が埋葬されたときはまだ洗礼も受けていなかった.....それだからみんなの中でいちばん可愛かったのだ!.....多くの苦労を重ねながら育てている。乳母の代わりにしてくれる白い羊がいた

のだけれど、山の狼めらに喰い殺されてしまった……あたしの孫は花のように萎れてしま  
う! あたしの孫は、夜明けを見られない星のように、ゆっくりと、ゆっくりと死んでいく!」<sup>8)</sup>

この戯曲には筋らしい筋も劇的な事件もほとんど見られず、冒頭の老婆の独  
白において、一家を襲い次から次へと親や幼い子供たちを奪い、遂にはたった  
ひとり残された孫さえもあの世に連れ去っていく目に見えない不思議な力=死神  
に言及する中で、Valleは人生における不可解で悲劇的な神秘に注目している。

この戯曲のテーマは理不尽ともいえる宿命的な死とそれに起因する残された  
者の孤独、寂寥感だと思われる。両者のうち死そのものはさほど悲劇的には提  
示されていない。この作品において悲劇的なのは、むしろ、子や孫を失い、寄る  
辺のないままひとり取り残された老婆の寂寥感のほうであろう。

「あたしを残して逝ってしまったんだね、坊や! なんてひとりぼっちにしておくれだ! あ  
あ! おまえの天使のような魂は、どうしてあたしの口にキスをして、苦しみでいっぱい  
のあたしの魂を連れ去っておくれでないんだい?……おまえはあたしの人生のこの寂しい  
礼拝堂にあって、白薔薇の花束のようだった……おまえがあたしに両腕を伸ばすとき、そ  
れは天国で聖なる長老たちをうっとりさせるナイチンゲールの無垢な翼のようだった。お  
まえがキスをしてくれると、その口は夜にむかって開く、陽のふり注ぐ窓のようだった……  
おまえはあたしの魂のこの暗い礼拝堂にあって、白蠟の大ろうそくのようだった!……あた  
しの孫を返しておくれ、邪悪な死神よ! あたしの孫を返しておくれ!……」(pp.431-432)

孫たちすべてを失った老婆の悲しみのシーンは、メーテルランクの『ペレアスと  
メリザンド』の終幕で、老王Arkelが孫のペレアスと別の孫の妃メリザンドを失い、  
過酷な運命を前にして無力感を覚えるシーンと二重写しになって見える。

## 2) *Comedia de ensueño*

この作品は先にも述べたように*Jardín umbrío*の増補版*Jardín novelesco*(05)の  
中で初めて発表される。

盗賊の一味が稼ぎを終えて、シルビア婆さんが待つ山の洞窟に戻ってくる。  
略奪品の中に、頭目が切り取った手首があり、その指には指輪がたくさん嵌めら  
れている。逃げる最中に切り落としたものだった。貪欲な手下たちはその指輪  
のすばらしさに目が眩むが、頭目は手首の持ち主の若い女性に強く惹かれる。  
老婆によれば、その娘は魔法をかけられている囚われの身の王女ということ  
である。戦利品の分割をしている間に野良犬が指輪のはずされた手首を咥えて  
逃げる。頭目は取り戻してきたものに自分の財産の半分と指輪全部をやると言っ  
て、手下たちに犬のあとを追わせようとするが、「お前たち、探しまわるような無駄  
なことはするんじゃないよ、王女の手など見つからず、年老いて路傍で野垂れ死

にするはめになるから……」(p. 506)と言う老婆の言葉に尻込みし、誰も動こうとしない。業を煮やした頭目は、月が照らす山道を、まぼろしの王女の手を求め、馬を走らせひとり去っていく。

この戯曲の面白さは目に見えない不思議な力というか神秘によって、主人公の心にドラスティックな変化が生まれるところであろう。

頭目が手首を取り出すと、手下たちはそこにちりばめられた高価な指輪の美しさに目が眩み、分け前としてそれを欲しがらる。これに対し、同じく物欲にとらわれている凶暴な頭目の心理には大きな変化が生じる。

老婆            こんなすごい宝石は見たこともないよ!  
 頭目            フェラゲー、おめえの袋にはなんにも残ってねえだろうな?  
 フェラゲー     残ってませんよ、お頭!  
 頭目            で、おめえのには、ガラオール?  
 ガラオール     残ってませんよ、お頭!  
 頭目            で、おめえのには、フィエラブラス?  
 フィエラブラス 残ってません!.....  
 頭目            よし、わかった。いいか、おめえたち、騙したりしやがったら、命はねえから覚とけ。婆さん、ここを照らしてくれ。(p. 503)

このように、初め頭目は略奪品に強い執着を見せているが、自分が切り落とした手首を眺めているうちに、物欲から離れ、その持ち主に対する思慕の念を募らせていく。

頭目            さわるんじゃねえ、このくそったれめが。運悪くこの刀で切り落としてしまったその手を下におろすがいい。そいつを見たときそんな風に俺も目がくらんでいたんだろうよ! かわいそうにその白い手もすぐに花みてえに萎んでしまうんだろうなあ! 俺のお宝全部をくれてやってもいい、切った場所にもとどおりくっつけてくれたら!.....  
 老婆            そうしたらもっとどでかいお宝が手に入るかもね!  
 頭目            あの女ひとの顔を拝めるものなら、この命をくれてやってもいい。婆さん、あんた手相の謎が読めるんだらうから、その女が誰か教えてくれ。(p. 504)

こうして、次のト書きに見られるように、凶暴な頭目の心の中に大きな変化が現れていく。

「頭目は物思いに沈む。悲しげな色が顔を蔽う。」(p. 503)

「頭目、ため息をつく。彼の妻みのある頬にふたつぷの涙が流れるのをみて、手下たち

は驚き、押し黙る。」(p. 504)

「頭目は無言のまま物思いに沈む。」(p. 505)

「頭目は黙り込んで、火を見つめる。ふたたびもとの夢想の霧のなかに沈む。」(p. 505)

物欲にとらわれた人物が死のもつ神秘性、官能性などの魔力に憑かれ、物質主義から精神主義へと変身するテーマは、エスペルペント期になって*La rosa de papel*(1924)『造花のバラ』とか*La cabeza del Beutista*(1924)『洗礼者の首』のような戯曲に受け継がれていく。<sup>9)</sup>

## VI. おわりに

以上、習作期におけるValle-Inclánと演劇との出会いをたどる中で、その頃に発表した戯曲三作品について考察してきた。三作品のうち、Valleのお気に入りのテーマが扱われているとはいえ、*Cenizas*は現在ほとんど我々の興味を引かない。若者と年上の夫人の不倫とかデカダンな愛の称揚とか社会通念への反逆などは、今日ではあまりに平凡すぎるからである。これに対して、神秘や宿命、さらに死と官能などがテーマとなっている*Tragedia de ensueño*と*Comedia de ensueño*は、小品ではあるが我々の心の内奥を揺るがす魅力を備えている。

本論で触れたように、Valleは若い頃から演劇に強い関心を抱き、戯曲を書くよりも前に、自ら舞台に立ち、役者として成功を収めることを切望した時期があった。だが、彼がすぐに自らの限界を悟り、役者稼業を断念したことはスペイン文学にとって幸いであった。役者に専念していたら後の大劇作家は生まれなかったかもしれないからである。

ともあれ、Valleは*Cenizas*により劇作家としてもスタートを切った。だが、この時期に発表した小説や短編に較べると、後の大劇作家Velleの力量を十分に窺わせる作品であるとはいえ、戯曲の数は極端に少ない。*Cenizas*が短編*Octavia Santino*の改作であったこと、また、*Tragedia de ensueño*と*Comedia de ensueño*が短編集の中で対話体の短編というか読むための戯曲として発表されたことなどを考えれば、Valleはこの時期まだ本格的な戯曲を書くに至ってはおらず、まだ劇作家Valleの胎児期であり、その真の誕生は1907年の『野蛮喜劇』二作品の発表を待たなければならない。

## 註

- 1) 堀内(1991):「Valle-Inclánとメキシコ」, *Estudios Hispánicos* 16, 大阪外国語大学, p. 77を参照。

- 2) Lima, Robert(1995): *Valle-Inclán El Teatro de Su Vida*, Vigo, Nigra, p. 98.
- 3) *Ibid.*, p. 101.
- 4) Fernández Almagro, Melchor(1966): *Vida y literatura de Valle-Inclán*, Madrid, Taurus, p. 59.
- 5) Gómez de la Serna, Ramón(1969): *Don Ramón María del Valle-Inclán*, Madrid, Espasa-Calpe, pp. 50-51.
- 6) González López, Emilio(1967): *El arte dramático de Valle-Inclán*, New York, Las Américas Publishing Company, p. 33.
- 7) 鈴木他編集, 1979年, 『フランス文学辞典』, 東京, 白水社, 747頁
- 8) Valle-Inclán, Ramón del(1974): *Don Ramón del Valle-Inclán Obras escogidas I*, Madrid, Aguilar, pp. 427-428. 同書からの以下の引用については括弧内に頁を挙げておく。なお, 日本語訳は堀内「VALLE-INCLÁNの短編集『仄暗き庭』翻訳(その2)」, *Estudios Hispánicos* 23に拠る。
- 9) *La rosa de papel*では妻に死なれた直後のSimeón Julepeに, また*La cabeza del Bautista*ではDon Igiと共謀してEl Jándaloを殺害した直後のLa Peponaに, *Comedia de ensueño*における頭目と同じような心の変化が現れる。

#### 参考文献

- Lima, Robert(1995): *Valle-Inclán El Teatro de Su Vida*, Vigo, Nigra.
- Fernández Almagro, Melchor(1966): *Vida y literatura de Valle-Inclán*, Madrid, Taurus.
- Gómez de la Serna, Ramón(1969): *Don Ramón María del Valle-Inclán*, Madrid, Espasa-Calpe.
- Hormigón, Juan Antonio(1987): *Valle Inclán*, Madrid, Fundación Banco Exterior.
- González del Valle, Luis T.(1990): *La ficción breve de Valle-Inclán*, Barcelona, Editorial Anthropos.
- González López, Emilio(1967): *El arte dramático de Valle-Inclán*, New York, Las Américas Publishing Company.
- Greenfield, Sumner M.(1972): *Valle-Inclán, anatomía de un teatro problemático*, Madrid, Editorial Fundamentos.
- Valle-Inclán, Ramón del(1974): *Don Ramón del Valle-Inclán Obras escogidas I, II*. Madrid, Aguilar.
- 堀内(1978): 「バリエ=イン克蘭の前期作品における死のテーマについて」, 大阪外国語大学学报41号.
- ロベール・ファーヴル監修, 1995年, 『最新フランス文学史』, 東京, 河出書房新社.

アーサー・シモンズ, 1993年, 『象徴主義の文学運動』, 東京, 富山房.

メーテルランク, 1988年, 『ペレアスとメリザンド』, 東京, 岩波文庫.

鈴木他編集, 1979年, 『フランス文学辞典』, 東京, 白水社.